

多摩川“流域治水”の認知度向上に向けて (かわさきみどりの共創プロジェクト)

坂口 稔弥

関東地方整備局 京浜河川事務所 河川環境課 (〒230-0051 横浜市鶴見区鶴見中央2-18-1)

多摩川流域治水プロジェクトについては、事業推進とあわせ各種広報活動にも取り組んではいるが、認知度は低いと言わざるえない。沿川自治体である川崎市が2024（令和6）年に予定している市制100周年、全国都市緑化フェアのイベントに併せて、多摩川を管理する京浜河川事務所では、好機と捉え関係機関と連携・協力し、「多摩川流域治水プロジェクト」等の治水事業をPRすべく検討したものである。

キーワード 多摩川、流域治水、広報、レインガーデン、河川名標識

1. はじめに

多摩川は、全長138km、流域面積は1,240km²。山梨・東京・神奈川県を流れる一級河川である。このうち京浜河川事務所は、河口から万年橋までの64.3kmを管理している。沿川自治体のひとつである神奈川県川崎市は、多摩川右岸に位置し、約28kmの区間接しており、「ふるさとの川・多摩川」とシンボルに掲げ、多摩川に関する様々な取り組みを実施してきている。



図-1. 多摩川京浜河川事務所管理区間マップ

この川崎市では、2024（令和6）年に市制100周年を迎え、また、全国都市緑化フェアの開催が予定され、これに取り組むべく「川崎市市制100周年記念事業・全国都市緑化かわさきフェア実行委員会」が設立され、京浜河川事務所も構成団体の一員として参画している。

川崎市では、全国都市緑化かわさきフェアの開催を機に、みどりの力を活かし、市民、企業、大学、行政等の多様な主体との共創により『みどりでつなげる、暮らしやすく、住み続けたいまち』の実現を目指し、みどりの

文化を醸成するため「みどりの共創プロジェクト」を立ち上げた。

2. 京浜河川事務所の対応

(1) 広報担当者の派遣

当初の段階では、全国都市緑化フェアにおける役割及び多摩川での実施は未定であったが、フェアには多数の来客が見込まれ、大きな広報効果が期待できることから、京浜河川事務所としても、広報担当者を派遣した。

(2) 対策チームの結成

10月に開催された川崎みどりの共創プロジェクトのキックオフセミナーに参加したが、ブース等を出展するなどの単なる広報活動ではなく、関係機関との連携して推進することが必要と判断されたことから、事務所内の各課（河川環境課、工務課、調査課、管理課、防災情報課）横断的なチームを結成し、対応することとした。これをチーム「Kawasaki」と命名した。

3. チーム「Kawasaki」の取り組みツール

結成時は、新型コロナウイルスの対応のため、在宅勤務等を行っていたところであり、事務所内で全員が揃った打合せ・会議開催は困難な状況であった。このため、各種ツールを積極的に活用し、情報の共有、意見交換等を行った。

(1) Microsoft Teams

Teams内にチーム「Kawasaki」のチャネルを作成し、各自がインターネット等で収集した情報や資料の共有のほか、意見交換等をチャットで行った。また、打合せについては、テレビ会議機能を利用し、リモートで

開催した。

(2) Garoon

打合せの各自の予定の確認にあたっては、星取り表を作成するのではなく、Garoonの都合がいいコマを自動的に判別する機能を用い、打合せの開催・招集を効率的に実施した。

4. チーム「Kawasaki」の現地確認

インターネットによる情報収集のほか、現地にも積極的に足を運び、状況の確認を実施した。

(1) 出張所への併任

多摩川の下流部を管理区間にもつ田園調布出張所に併任し、より一層現場を見ることとした。

(2) 趣味と実益

休日には各自が、趣味に興じるために多摩川へ出向くことによって、平日とは違った状況を確認することが出来た。

(3) 確認した現状と問題

多摩川は堤防天端は、歩行者、自転車利用者が、高水敷（河川敷）は公園やグラウンドの利用者が多く、特に休日は危険ともいえる状況であった。また、各種看板が設置してあるが、特に「河川名標識」の劣化・損傷が酷く、当初の設置目的を果たしていない標識が多く見られた。



図-2. 河川名標識の現状

会にあらためて「多摩川流域治水プロジェクト」及び「京浜河川事務所」の知名度の向上を目的として掲げることとした。

6. チーム「Kawasaki」のアイデア

「多摩川流域治水プロジェクト」及び「京浜河川事務所」の知名度の向上という目的を達成するためには、従前より実施していた広報に加え、新たな展開・仕掛けをする必要があると考えた。

このため、情報収集及び現地確認結果を基に、各種ツールを使用して、新規のアイデアを出し、意見交換を行った。様々なネタやアイデアの中で、主な2つについて紹介する。

(1) 河川名標識の活用

多摩川では、多数の河川名標識が存在しており、川崎市区间でも、24箇所を設置されている。この標識はもともと、橋梁利用者からの視認のために設置されたものであったが、堤防天端上にあり天端利用者への訴求効果は大きい。まずは、標識をリフレッシュさせ、ここに多摩川流域治水プロジェクトのPRを行うとともに、川崎市内に存在する企業や団体等とコラボレーションし、多摩川オリジナルの標識へとり、マスコミや人々の話題に上り、もって認知度の向上に繋げる。

(企業コラボについては、現在調整中)



図-3. 新河川名標識（案）

5. チーム「Kawasaki」の目的設定

情報収集や現地確認を行う一方で、川崎市のワークショップにも参加した。

このワークショップには、行政のほか企業や団体など様々な人が参加しており、参考までにヒアリングをしたところ「多摩川流域治水プロジェクト」はおろか「京浜河川事務所」についても、知らないという方が大多数という事実が判明した。

流域治水の理念は、あらゆる関係者が協働し、流域全体で水害を軽減させることにあるが、まずは知ってもらい、理解をしてもらうことが重要だと考えられ、この機

(2) レインガーデン

緑化フェアとあって、今後、街中のいたるところで緑化がされる可能性がある。恒久的な緑化箇所において、レインガーデンの設置を提案し、その仕組みとともに流域治水をPRしていく。

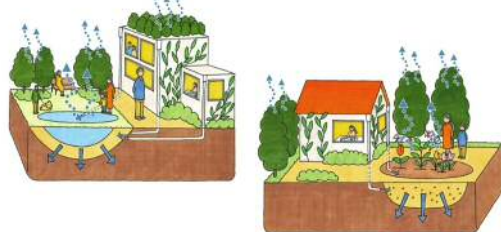


図4. レインガーデンイメージ

7. まとめと今後の課題

今回、「川崎みどりの共創プロジェクト」に参加し様々な企業や団体等と意見交換したことによって、新たなアイデアが生まれた。一方、多摩川流域治水プロジェクト及び京浜河川事務所の認知度の低さが判明し、効果的な広報活動が必要だとあらためて、認識させられたところである。

このため、今回提案したアイデアの実現に向けて、引き続き関係機関との調整を進めていくとともに、流域内に存在する様々な企業や団体等との新たな連携・協力に向けて、積極的に取り組んでいく。